

佳作

ぼくが赤ちゃんだったとき

荒川区立第三瑞光小学校二年

小林 新

やなぎ田先生、こんにちは。

このお話は、お父さんと、「ぼく」が赤ちゃんのころの思い出話をするお話です。

もうすぐぼくもたん生日だし、もうすぐ赤ちゃんがうまれるのでこの本をえらびました。

一ばん心にとこったばめんは、あるけるようになった「ぼく」が、しりもちをついたり、ころんだりしても、一人であるいていくところです。なぜかというと、赤ちゃんは、ころんだりしたらないちゃうけど、「ぼく」は、なかなかつたからすこいと思つたからです。

ぼくが赤ちゃんの時は、足の力がつよくて、すぐにあるけるようになったよと、お母さんから聞きました。

このお話に出てくるお父さんとお母さんは、たいへんだなと思いました。なぜなら、「ぼく」は、昼まにねて、夜中におきるからです。それから、びよう気をした時はとても心ぱいをしていました。この本を読んで、ぼくもこのお話のようにいろいろなことがあつて大きくなつたんだなと思いました。おうちに赤ちゃんが生まれたら、お父さんもお母さんもいそがしくなるので、ぼくもお手つだいをがんばりたいと思います。

〈柳田邦男先生からのメッセージ〉

『ぼくが赤ちゃんだったとき』を読んで、自分

が赤ちゃんだったとき、どんなだったかを想像したり、赤ちゃんを育てるお父さんもお母さんもたいへんなんだということに気づいたりするのは、いいいいけんですね。

自分にももうすぐ赤ちゃんが生まれるのを知って、こういう絵本を選んで読むというのは、とてもいいことですよ。そして、お父さんやお母さんのいそがしさを理解して、「ぼくもお手つだいを」しようと決心したことに、拍手を送ります。